

# 幕末の悲劇

## 水戸天狗党事件（後編）

（非情な処分の裏に慶喜の悲痛な思い有り）

橋慶喜が天狗党追討軍の総大

将となったことから事態はク  
ライマックスを迎えます。当時、慶  
喜は禁裏御守衛総督という京都を警  
護する役職についており、天狗党が  
京に近づけば討伐せざるをえない立  
場になりました。

この時、福井藩を含む諸藩は第一  
次長州征伐に多数の兵を割っていた  
ことから（福井藩主、松平茂昭は副  
総督として藩兵3千7百人を率いて  
豊前に出陣中）、慶喜は加賀藩、会  
津藩、桑名藩の兵4千人を従えて討  
伐に向かいます。中でも主力となっ  
たのが加賀藩で、敦賀の葉原に陣を  
敷き、天狗党と対峙。その交渉窓口  
となり、同藩の軍監（軍の責任者）  
永原甚七郎が武田耕雲斎と交渉を

行っています。

一方、福井藩の家老で府中（武生）  
城主、本多副元、鯖江藩主、間部  
詮道は、天狗党殲滅の方針を固め、



「水戸天狗党の福井県内行程」（『図説 福井県史』より）

自領に通じる峠を嚴重に封鎖し、天  
狗党が敦賀方面に進路を変更すると  
そのまま追撃に入りました。当時の  
福井藩には、安政の大獄で春嶽が隠  
居に追い込まれるなどしたため、幕  
命を実直に守ろうとする意向が強く  
ある一方で、親交の深かった水戸藩  
の家臣が起こした事件であり、積極  
的に動けないといったジレンマを抱  
えていました。

頼みの綱の慶喜が天狗党追討軍の  
総大将であることがわかり、包囲の  
環が迫って行く手もふさがれたた  
め、追討軍による総攻撃直前の12月  
11日、天狗党一行823名はやむな  
く敦賀の新保で降伏しました。初め  
加賀藩に預けられ、丁重な扱いを受  
けましたが、幕府に引き渡された後  
は、肥料となる鯨粕を貯蔵する蔵16  
棟に送られ、罪人の扱いを受けまし  
た。その内353名は形式的な取  
り調べを受けて斬罪となり、慶応  
元（1865）年2月、敦賀市松島  
町の来迎寺境内で刑に処せられまし  
た。残る約470名も遠島・追放・  
水戸渡し・寺預け・江戸送りとなり、  
水戸で始まった天狗党の乱は、敦賀  
で終息したのです。

松平春嶽は、動くに動けなかった  
福井藩に代わり活躍した加賀藩の働

きに感謝し、慶応元（1865）年正  
月3日、使いを金沢に送り謝辞を述べて  
います。また明治に入り、自らの回  
顧録「逸事史補」の中で、慶喜が天狗  
党に対し、かつての部下ながら厳し  
い処置を取ったことについて、「武田  
らは…ああかわいそうであった。」慶  
喜公が（私に）言われるのは、「私が  
もし春嶽さんであったならば寛大な  
処分ができて、（彼らは）禁錮くらい  
で済んだだろうが、実に気の毒であつ  
たことしきりである。」と、前水戸藩  
主徳川斉昭の子であつたが故に、厳し  
く接しなければならなかつた背景を  
説明しています。

### 関連史料・ゆかりの地

#### ニシン蔵 （水戸烈士記念館）



天狗党浪士が収容されたニシン蔵16棟のうち、1棟が松原神  
社境内に移築されました。現在は水戸烈士記念館として使用さ  
れています。松原神社は彼らを祭神として祀った神社です。境  
内の梅の木は浪士たちにちなんで水戸から献木された偕楽園の  
梅です。この縁で敦賀市と水戸市は姉妹都市になっています。

【住所】敦賀市松原町2 松原神社内（敦賀ICより車で約13分）

参考資料等 現代語訳『逸事史補』福井県観光営業部ブランド営業課  
『図説 福井県史』福井県